

佐伯方言雑説(三)

贊助会員 山内武蔵

ぞうくる

ぞうぐるは、からかう、ふざける、の意味。大分・熊本地方の方言である。ふざけるな、冗談言うなといふところを、ぞうぐるなどと制止するのは、私どもがよく使う言葉である。ぞうぐるを「象くる」ともじつて「ぞうぐる」などいう。象には竹縫が恐ろしい所らしい。ぞうぐるなをぞうぐるなどといふ人が多い。ぞうぐるはぞうぐるの龍であろう。ぞうぐるはぞうぐるの転で、ぞうぐるは「道化る」と書き、道化をする。滑稽なことをする、おどける、ふざけるの意である。道化は、道法をもつて人を教化するという、しかつめらしハ意脉の言葉であったが、何時か間にか、人を笑わせる言語や動作。おどけ、滑稽等の意味するものが変つてしまつた。

現在、道化師とか道化者と云うコメディアンが、舞台やテレビで、そのおどけた言動を売り物にして、世智がらい世の中に笑いの一ときを与えていたが、道化にも限度があり、あまりぞうぐり過ぎると嫌気がさす。適度なところで竹縫に入る必要がある。

ちーちゃん

片足でびよんびよん跳び歩くのをちーちゃんといふ。こちらのころ、びっこをひいて歩く人を見ると「ちーちゃん」と、恥ぢれ口をつけっていた。

ちーちゃんは、ちーちゃんもがもがの轍であろう。片足を後にあげ、他方の足一本で跳び歩く遊びで、ちーちゃん、ちーちゃんながら、ちーちゃん、けんけんなど別の別名があるが、佐伯地方のちーちゃんが、他の呼び名より、片足遊びの実感が一番よく出てゐるようだ。

小学校のとき、ちーちゃん、戦やちーちゃん相撲をよくやつた。ちーちゃんしながら石けりをすりとか、鬼ごっこをするとか、ちーちゃんしながら遊ぶ遊戯は深山あつた。

ちよこ

さがずきのこときちよこともいう。ちよこ猪口と書いて、ちよくの轍じたものである。ちよくも猪口と書く。猪口と読むのは、鐘の入声の字音とひうし、また福建音とも、または朝鮮音であるともいう。陶磁器で、形小さく、上開きで下すぼみの酒杯、すまわちさかずきのことである。膝栗毛に「ちよくにいつはいつハで一口のみ」とある。

本膳料理の小舟。また刺身、酢のもの等に入れる小さく、本膳も猪口と呼ぶ。

ちよく、ちふこのつく言葉に色々ある。

○ちよく、ちふこのつく言葉に色々ある。
○ちよく、ちふこ、佐伯方言で、酒を買ませて、おのれの意に従わせることをいう。ちよく即ち酒で相手を買収すること。

○ちよこざい 猪口才と書き、さしだがましい、小ざかい、小利口、すばしこいものの意である。
○ちよこちふこ 小股で走るさま。幼児の歩くさま、拳銃の落着みなさま。また、しばしば、ちよいちよい

の意。

〇ちよこさんと 小さくかしこまつて動かぬきま。
〇ちよこまか 拳銃の落ちつかぬきま。
〇ちよこと 才時。ちよつと。
〇ちよびと 少し。わずか。ちよんぱり。

つくねむ・つくばう

つくねむもへくばうも、しやがも、うすくまる、かが
むの意味である。全國方言辞典を見ると、つくねむは、
島根・広島・山口の各県と四国の方言で、九州では佐伯
だけの方言にちつている。また、つくばうは、新潟、岐
阜の一部と、富山・奈良・岡山・大分各県の方言にちつ
てある。広辞苑を見ると、つくばうはあるが、つくねむ
はない。

つくばうは、つくばふで古語である。蹲ふ、踞ふと書
いて、突き這ふがその語原である。
茶室の近くの庭に、低くすえである手洗ばちき、つく
ばいという。これは低いので、茶客が手を洗う時につく
ばうから、この名がついたといふ。つくばいは蹲踞と書
くばつて平あやまりに謝る」という。

つづこする

「へへこすへでも知らぬ顔をしていく」という。道で
すれちがつても気がつかないのを、当てこすつて言つた
言葉である。この意味ならまだしも、時には些細ないや
かいごとで意志の疎通を欠き、道で出会つても見ぬふり
して通り過ぎると、怒りをこめて、この言葉を吐き出す
のを聞くこともある。

へへこするは、突きこするの促音化したもので、こす
ることは、すりみがく、やすりにする、おしつけてするの
意であるから、体と体とがぶつかるようになり合わな
くては、へへこするとは言えない筈である。それ違うさ
まで誇張して表現した言葉である。
へへこすると同じようだ、突きこすへへと促音化し
た言葉の中から、日ごろ使う言葉を拾つてみよう。

〇つづかけ 〇つづかれる 〇つづかやす

〇つづくる 〇つづくゆす

〇つづこゑ 〇つづこむ 〇つづころす

〇つづたつ 〇つづつく 〇つづばすす

〇つづばる 〇つづぱる

まだ外にたくさんあるだろう。

てかましい

「がきがきと何にでも手出しをして邪魔することもき
「でがまいい」と一喝していの親父の声を聞くことがあ
る。

このでがまいいは、手がかましいの意であろう。かま
いはがまいか口語であろう。かまいまはかまびすいと同
じ意で、やあがしい、やかましい、の意である。肥前風
土語に、「天皇陛下」勅りたまひしく『蠅の声・甚かまし』
とのりたまひき。

でがまいいは、手がかましいで、手を出してやかま
い、うるさいの意であろう。佐伯の方言にやせかまいい
という言葉がある。やわがしくてうるさいの意で、これ
にもやまいいがつかつてある。でがまいいの意味によく似た言葉は、でんごうがある。
いたずら・じょうだん・手出し・おせつかい、の意があ
る。「でんごうするな」は、いらぬ手出しきする女の意

味である。このやんごとは、華語の中によく出ている。

なえ

なえとは、地震のことである。今の人で地震のことき、なえなどいう人は滅多にないが、ごく年寄りの人たちがいうのを時たま聞くことがある。地震があると、「なえ」がいって。今何どきか」といって、天気を予告していた。昔の人は「五七の雨」へ「日照り、四つ六つどきはいつも大風」といって、地震のいつたときで天気を予想していた。五つ七つどきなら雨、八つ九ら晴、四つ六つ等なら大風と予報していたのである。

(注) 五つ八時ごろ、六つ一時半ごろ、八つ二時ごろ、四つ十時ごろ、六つ六時ごろ、

このなえは、古語のなみから転じたものである。なみの元の意味は地である。なみふるといつて、地がふるいうごく、地震がするの意であつたが、なみを地震の意に使うようになつた。方丈記に「おそるべかりける風、たゞなみなりけりとこそ覺え侍りしが……」とある。このなみが訛つてなえになつたのである。

「地震、雷、火事、親父」と、昔から世の中で愚弄し合ひをあげてゐるが、その筆頭に數えられ、いろいろ地震は、方丈記にあるように、おそろいものは、たゞなみであると覺え侍り、地震には充分に注意が肝要である。

なおす

昔のことであるが、佐伯から東京の某小学校に勧められた一つの若い教師があつた。赴任して間もないころ、ある日国語の時間中、生徒たちに教科書を机の中にしまわせようと、「本をおおしなさい」と佐伯が言え出しで命じた。児童たちは一齊に机の上の教科書を、きちんと真

直に置きかわした。本をしまおうとしないのを見た先生は、自分の言葉が方言であるのに気がつかず、再び大声で「本をおおしなさい」とどなつた。児童たち生きよとばかりであつたという。

物をしまう、片附けることを、佐伯ではまおすという。このまおすは、筑紫方言であるが、関西以西ではどこでも広く使われているらしい。まおすは直すで、辞書を見ると、もとのように正しく「よくなる、復帰させる、改める、かえる、修正する」訂正する、添削する、とりつくろう、とりなす、正すい位置にすえる、修繕する、疲倦を治療する、などと色々な意味があり、最後に「方言」しまう、收める、片づけると出している。

ねんごくせえ

ねんごくせえは、喧嘩のこゝによく出る言葉である。
ねんごくせえとは、生意氣を、こしやくな、いやらくさいの意味である。

ねんごくせえは、ねんごくさいの訛つたものであろうが、この言葉の語原は何であろう。
辞書で、ねんこ・ねんご・ねんこうと調べてみた。

ねんこは、枯古と書き仏教語で、古人の逸事を説いて批評すること。枯擲、枯撲ともいう。

ねんごは、枯語と書き、これも仏教語で、禅僧が引用して他に示す語。古則、公案の類である。

ねんこうには二つの意味がある。一つは枯香と書き、香をつまんで焚くこと、すなわち焼香の意。または枯香文のことという。枯香文とは、禪宗の僧が死後に対する哀悼の意を表わして朗誦する文である。また一つは懸公

と書いて、ひげを生やしたままのことである。

桔香、桔語、あるいは桔香文を、しがつめらしく説いたり、読んだりするのを見て、友にして傳くもないものが、偉そうに振舞う力を皮膜って、ねんこ、あるいはねんご、ねんこ、くさいことをするといつたことからねんご、くさいが生まれ、ねんごくせんぐは轟じきのではあるまい。

また、愈公から、なまづひげを生やして生意氣だとの意味から、この言葉が生まれたのかもし知りたい。面白い言葉で、何か意味がありそうだ。

はんと

は、んどとは、水がめのことである。瀬戸もので色は小豆色をしていて、へやへやと光っている。大きさは大小様であるが、水を貯えらはんどは高さが一メートルぐらい。口のさしわたしが五、六十センチの土方が普通である。今は滅多に見ないが、昔はどこの家にも、台所の流し場の脇にどつかと坐っていた代物である。

は、んどにはいつも水が貯えてあり、私どもこどものころは、このはんどの水を桶桶に汲んで呑んだり、おふんだらいへ佐伯方言、手水(たらい)に汲み取って顔を洗つたものである。

このはんどに、毎朝毎夕水を運ぶのは、二どもに課せられた日課の一であつた。桶を六尺棒で前後にかたげて、共同井戸に水汲みに行く。鉢瓶で汲んでいよいに汲み入れ、一杯になるとかつて、こぼさないようになつたよだしかがら帰つてはんどに移す。鉢瓶もするうちにばは、着物の裾はびしょじょになつて、殊に冬の朝の水くたよだしか仕事であつた。今ほどこの家も上水道が通じ、栓をひねれば水が出てふんだ

んだけえる。昔の水汲みの苦勞を思うと、离世の感がある。はんどは、今では全く無用の長物と化し、物置の片隅に置かれて、いふるぐたものに入れもろくなってしまい。色のやも消えて見るだけもない。小さいはんどは、今でも台所の戸棚の隅にあつて、梅干やらつぎょう漬の入れものになつていろのを見ることがある。

ふ

「ふがよい」「ふが悪い」という。または「間に合うでふがよかつた」「あの人ふが悪い人だ」などいう。このふは運の意味である。ふき運の意味に使うのはどうしてであろう。辞書を探して、ふは符ではあるまいかと考えた。

符には、次の四つの意がある。

(一)ありふ。(二)公文書の一つで太政官や省台から所管の諸司へ下す文書。(三)神仏の守り札。おふだ。(四)法師、修驗者。陰陽師などの加持の札。

この中の、神仏の守り札、おふだ、加持の札が、人の運の吉凶をあらわすものと考えて、運を符に結びつけて、運がよければ符がよい。運が悪ければ符が悪い。したまではあるまい。

ふをきらぬという言葉がある。同じことを繰りかえしてやめないこという。この言葉のふは何を意味するのか、よくわからぬ。何がわけがありそつである。運の意味つかうふは九州方言であるが、ふをきらぬ、皮、佐伯だけの方言らしい。

へづく